
企画【candy store】

九条 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

企画【candy store】

【Nコード】

N1728S

【作者名】

九条 樹

【あらすじ】

桜庭春人さん主催の【candy store】へ投稿した作品です。全7回にわたり、毎回いろいろなお菓子がお題として設定されています。

第一回：【私は愛す】 お題「アイスクリーム」

柱の陰からこちらをうかがっている君がいる。

君は時折前を通り過ぎる。そしてしばらくして戻ってきたり。

また柱の陰に隠れてこちらを覗いてみたり。

もう3時間以上この辺りをうろろしている。

そろそろ閉店時間、君は結局何もせず帰っていく。

君は今日も来ているね。

そして今日もいつもと同じように、柱の陰に隠れてこちらをうかがっている。

ばれていないつもりなのかな？

この地下街のスペースに、一週間限定でアイスクリーム専門店を出して今日で7日目。

そう、今日が最終日。君は初日からずっと毎日夕方になると現れる。

君がなぜ毎日柱の陰から覗いているかは、もうわかってるよ。

なぜなら、私はこの棚の陰から君をずっと見ているから。

君は私の視線には気付いていないでしょ？君が見ているのは彼女だけなんだから……

このショップには売り子が3人いるけど、一番人気は君のお目当ての彼女。よく通る声で元気いっぱい、溢れんばかりの笑顔がなんとも言えず可愛らしい。もちろん仕事もよくできる。なのでお客さんの受けも一番良い。君が好きになるのもうなずける。

でも君はこの一週間、陰から見るだけで一度もアイスクリームを買いにこないね。

彼女が気になるなら毎日買えばいいのに。

そうすれば顔も覚えてもらえるだろうし、何回目かにはに少しくらい言葉を交わせてなにかのきっかけになったかもしれないのに。

私は君と彼女をかげながら応援しているんだよ。

私も彼女と出会ったのは丁度一週間前、この場所にお店を出した日のこと。

それ以来私も彼女のが好き。でも君の彼女を想う気持ちの好きとは違ふよ。

そして君のこともこの一週間見ていても気に入った。そう、君のことも好きになった。

でももちろん恋愛感情じゃないよ。

このお店は期間限定だから、ここが終わったらまた場所を移動して店を出すことになっている。

次ぎは確か他県だから、今のように毎日覗きにくるなんてできないはず。それに次ぎの場所も君は知らないでしょ？

あと一時間もすれば閉店となり、ここには二度と戻って来ない。

だから早く買いに来て。

そして彼女に次ぎの出店場所を聞いて。ちゃんと聞ける？心配だな。

私も次ぎの店に行けるかどうか分からない。だから君達のことを見守ることも出来ないかもしれない。

今後二人がどうなるのかずっと見ていたかったけど、それは叶わない。

せめて今日ここで二人が言葉を交わし、次の場所を聞きだすのを見届けられたらそれでいい。

だから早く来て。

あと30分で閉店だよ。早く……

閉店時間が刻一刻と迫る中、少し考えてみた。

よくよく考えてみると、君は初日からずっとこちらをうかがっていたよね。

そして初めからお目当ては彼女だった。

そう考えてみると、ここにこのお店が出店され、彼女が売り子としてここに居ることを初めから知っていたの？

もしかしたら前の、ううん。もっと以前から彼女のことを知っていてずっと追いかけてるの？

じゃあ次ぎの出店先も知ってるのかな？

「ねえ、あの子また来てるよ」

別の売り子が彼女に話しかけている。

ここからだと言き取りにくいを意識を集中して耳を傾ける。

「そうね」

彼女が少し照れ気味に答えるのが後ろからでも分かる。

「よっぽどあなたのことが好きなのね」

「そ、そうかな……」

「そうに決まってるじゃない。毎回売り場が変わっても追っかけてくるなんてよっぽどだよ」

「やっぱりそうか。君は以前から彼女のことを知っていてずっと追っかけてるんだ。」

彼女もまんざらでもないような反応よね。

「あなたもあの子のこと気になってるんでしょ？あの子が買いに来た時の笑顔は特別じゃない」

「そ、そんな。特別なんで、私はただ……」

「ただ、何よ。照れなくていいって」

「ち、違う。ただ……よく買いにきてくれるいいお客さんだから」「いいお客さんって。あの子は毎回最終日に買いに来て、『次ぎのお店はどこで出すんですか？』って聞くだけじゃない」

なるほど、そういうことか。ちゃんと聞いているのか。

じゃあ今日もそろそろ聞きにくるのかな。

「ほら、そろそろ来るわよ。どうせあなたの前に立つんだから、またいつもの笑顔を見せてあげなよ」

「もう、そんなんじゃないって」

どうやら君も覚悟を決めたようだね。こちらに向かってくる。彼

女も君のことは気に入ってるようだけど、君はきつと知らないだらうね。もったいないな。

「あ、あの……」

なによ君のその頼りない声は。もっとはつきり話さないよ。

「いつもありがとうございます」

逆に彼女はしつかりした声で応える。

「え？僕のこと覚えてるんですか？」

「もちろんです。売り場が変わってもいつも来てくれてますよね。ちゃんと覚えてますよ」

頼りない君に比べて、彼女の方がよっぽど積極的じゃない。しつかりして。

「あ、ありがとうございます。あの… 次ぎはどこで出店されるんでしょうか？」

「えっと、次ぎはちよつと遠いんですけど、○×の 百貨店に2週間の予定です」

「そうですか… 確かに遠いですね」

君の表情が曇る。それはそうだ。ここからじゃとても毎日通える距離じゃないよね。

「そうですね。いつも来てもらっているのに申し訳ないですけど、次の場所にはちよつと来ていただけそうもないですね」

「では、その次の場所はもう決まっていますか？」

おお！やるじゃないか。その質問は君にしては上出来ね。

「ごめんなさい。その次というのはまだ決まっていなくて。いくつか候補は出ているようなのですがまだはつきりしていないようで」

「そうですか……」

せっかくの君の勇気も空振りか。

「で、今日は何になさいますか」

「あ、そうですね。では、期間限定のナッツ&メープルのカップで」

「ありがとうございます」

そう言っただけで彼女がこちらを向く。

そして私の隠れている棚の扉を開ける。

私の目の前にあるキャラメルやストロベリーを掻き分け私に手を伸ばす。

彼女のきめ細やかなやわらかい指が私を包み込む。

そしてレジ横の台に私を置いて、メモに何か走り書きをしてそのメモと一緒に私を袋に入れる。

「380円になります」

「あ、袋は要りません」

彼女は小さく首を振り小声で、「今日はこれで……」と言っている。

君は黙って頷き私を受け取る。

「ありがとうございました」

私は君に地下街の休憩スペースに設けられたベンチまで連れていかれる。

君は袋から私を取り出そうとして、一枚のメモが入ってるのに気付く。

そしてそのメモを見た君の顔が驚きから笑みに変わる。

メモを私の傍らに置き、携帯を取り出そうとしている。

私は横目でチラリとメモを確認する。

『出店先が決まったら教えたいので、私の携帯番号を書いておきます。090-980x-0x □』

なるほど、やっぱり彼女の方が積極的だね。

君は大急ぎで携帯に番号を登録して、メモを大事に財布に仕舞った。

そうしてから、やっと私の蓋を開けた。

今後二人がどうなるか見届けることはできないけど、きっと上手くよね。頑張ってね。

第二回：【6月の雨】 お題「キャンディ／飴」

僕は日の出とともに家を出る。

未明まで残っていた雨も一応はあがったようだが、空は彩色の低い薄い雲に覆われている。

またいつ降りだしてもおかしくない空模様だ。

先ほどの天気予報では、昼頃までは小雨が降ったりやんだりすると言っていた。

それでも僕は、家の前で2、30分ほどかけすっかり準備体操をし、靴の紐を結び直し走り出す。

風は生暖かく湿度も高い。地面もまだ濡れているので少し走りにくい。

5分もしないうちにすっかり汗をかきはじめる。

気持ち悪な。でも昨日は一日中大雨で走れなかったので今日は走っておきたい。

昨日だけではない、6月に入ってからまとまった雨の降る日が多く、まともに練習できていない。

今日はせつかくの休日なので20キロ走をしたかった。

僕はロングラン用のいつものコースを時計を見ながら走る。

唯一の趣味であるマラソン。そのマラソン大会が2週間後に迫っている。

別にこんな雨の多い時期に大会に出ることもなかったのだが、逆に『コンディションの悪い環境でどれだけ走れるか』というところに興味を持ち大会出場を決意した。

今までのベストタイは3時間35分。特に早いわけではないが、個人の趣味としては十分の記録だと自己満足している。

6月に入ってから練習不足は、言いかえれば休息をしっかりとっているともいえる。

そのためか今日はこんな天気のにわりにスタートから体が軽い。
この気温と湿度で、無理せず走って3キロ地点で16分40秒は
十分な早さだ。

あとはこのペースをいつまで保てるかだ。

いつも1人で走る僕は、よく退屈をする。

20キロと言えば2時間程かかる。2時間も1人だと、変な言い
方だか『暇』だ。

だからそんな時は、いろいろ考えるようにしている。

最近は考えないようにしようとしても、ついつい考えてしまう事
柄がある。

それは、僕に最近できた彼女の事だ。

この世に生を受けて23年。初めてできた彼女だ。

こう言うつと変な奴に思われてしまいかもしれないが、僕はいたつ
て普通の人間だと思っている。

ただ他の人より少々シャイなだけなんだ。

自己判断だけど、顔も不細工ではないし、体格もジョギングを趣
味にしているくらいなので悪くない。背だつて低くない。性格だつ
て優しい方だと思う。でも女性と接するのが苦手で、今まで誰かを
本気で好きになることがなかったのが原因だ。

だからと言って女性に興味がないなんて事もない。いや、興味は
しつかりあった。それに付き合いたいと思う女性もいることはいた。
でも自分から告白なんてとても出来なかった。

今回付き合うことが出来たのは、僕が好きになった女性が積極的
だったことに誘因している。

いつも遠くから見ているだけの彼女だった。

学生時代にも興味を持った女性は何人かいたが、これ程まで明確
に好きだと思ったことはなかった。

そついう意味では初恋だったのかもしれない。でも僕の完全な片

思いだと思っていた。

しかし違った。彼女も僕に興味を持っていてくれたのだ。彼女からメモで電話番号をもらった時は信じられない気持ちだった。そういえばあの時食べたアイス。美味しかったな。

期間限定のナッツ&メープル。あの時の味は一生忘れないだろう。なんだかちよつと小腹がすいてきた。

アイスの味を思いだしたせいだけではない。もう走り出して1時間経過している。

距離も11キロ地点を越えた。

相変わらず降り出しそうな空だが、スタートしてからまだ一度も降っていない。地面もほぼ乾ききっている。

僕はポケットの中からチョコレートの一つ取り出し口に放り込む。汗をよくかく季節は、水分補給はもちろんのこと、栄養補給も必要だ。

途中何も食べずに20キロはきついで、いつもチョコレートを2〜3個ポケットに忍ばせてある。

13キロ地点で川沿いのコースに出る。

ここから土手を4キロほど走り、橋を渡って残り3キロは市街地を抜けて家に帰る。

13キロ通過時のタイムが1時間20分か、ちよつと遅れてきたな。

ずつと考え事をしていた為に、時計を見る回数が減ってタイム維持ができていなかったらしい。

まあ今日はタイムに拘らなくてもいい。湿度も高いし無理せず楽に走ろう。

奮発して買ったこのウェアは通気性が良くとても軽いので、汗でまとわりついて気持ち悪いなんてことはないが、この気温でこの湿度は体力を奪われる。

大会当日も梅雨時なので雨が降ってることは十分に考えられる。

そう考えると小雨でも降ってくれた方が良い練習になりそうだ。

そんなことを考えていたらとうとう振り出してきた。

僕の願いどおりの小雨だ。

地面がまた濡れてきたので、足を滑らせないように気をつけなければ。

大会前に怪我でもしたら目も当てられない。

しかし小雨はすぐに少し強い雨へと変わってきた。

強いと言ってもこれくらいなら大丈夫だけど、嫌な雨だな。

ちよつと気を紛らすために他の事を考えよう。

そういえばさっき彼女の事、どこまで考えていたんだっけ？

そうそう、アイスだ。アイスと一緒に電話番号をもらったんだっ
た。

それから2週間、結局電話出来ずにいたんだった。

でも女性に電話するんじゃないくて、『アイスを買に行きたいんだ』だから店員さんに次の出店場所を聞きたいんだ。と、自分に言い聞かせることでなんとか電話できたんだ。

あの時は緊張したなあ。

今までの人生の中で一番勇気を使った日じゃないだろうか。

その日、彼女は丁度仕事が休みだったらしく、少し世間話のようなものをした記憶がある。

舞い上がっていた僕は「はい、はい」と相槌を打っただけだった。

その後何度かアイスを買に行くうちに、彼女からのメールや電話が増えていった。

そしてあの日。彼女から付き合っしてほしいと言ってきたのだった。本来なら僕が言わなければならなかったのだが、いつまで経っても告白する勇気がもてなかった。

僕は彼女との距離をどうしても縮めることが出来なかった。

そんな優柔不断な僕なのに、彼女は愛想をつかすどころか、逆に告白してくれたのだ。

男として情けないとは思うが、彼女のお陰で付き合うことが出来て嬉しかった。

実は今朝も家を出る前に『今から練習をしてきます』とメールを送ったんだった。

朝早いメールなのにちゃんと返事をくれた。『大会まであと少しだね。無理して怪我しないようにね。頑張つてね』と、僕を気遣ってくれるようなメールだった。とても嬉しかった。こんな僕には勿体ない女性だ。

付き合い始めて2か月になるけど、まだ何も進展していない。もう2ヶ月も経つし、そろそろ何かあってもいい気はする……今はこうして愛を感じられるだけで幸せだ。

だけど本心はやっぱり、そろそろキスくらいは……

ちょっと変な想像をしてしまつて体が熱くなっている。

そのせいだろうか、自然とペースが上がっている。

時計を見るとこの1キロのラップタイムが5分15秒。早すぎる。少し落ち着こう。

感覚でペースを1キロ6分程に落とす。

小さく見えていた橋がだいぶ大きくなってきた。あの橋の所で土手コースも終わる。

僕は左に曲がつて橋を渡る。

この川はとても大きいため橋も700メートルある。

橋を渡りきれば残り3キロ。市街地を抜けて家に帰るだけだ。

橋の向こう側に誰かがいるようだ。

誰かがいても不思議ではないが、橋のたもとにじっと立っている。傘がピンク系統なので女性だろう。

走りながら徐々に近づいて行くと、その女性のさしている傘の輪郭がはつきりとしてくる。

あの傘は彼女の物と同じだ。

同じと言うよりもあれは彼女自身だ。なぜこんなところに？今日は仕事のはずだ。時計を確認する。

スタートして1時間40分程経っているので時刻としては8時前くらいだろうか？

近づくと彼女から話しかけてきた。

「よかった。もう通りすぎちゃったかと思って、心配してたところだったの」

「どうしたのこんなところで、今日仕事でしょ？」

「うん、もう行かないといけないんだけど、これを渡したくて」

「なに？」

「走ってる時には栄養補給が必要なんでしょ？」

「うん、いつもチョコを持ってる」

「知ってる。でも今度の大会は雨が降るかもしれないでしょ？」

「そうだね、梅雨時の大会だからね」

「そんな時期に一番ふさわしい栄養補給元を持って来たの」

「こんな雨の中わざわざ持ってきてくれたの？ありがとう。この時期にふさわしい物って何？」

彼女は答える代わりに僕のポケットにその物をつっ込んだ。

僕がそれを取り出そうとすると。

「ダメ、今はまだ仕舞っておいて。私が見えなくなったら食べてね」
そう言って彼女は雨の中傘を片手に大急ぎで自転車をこいで駅に向かった。

もっと一緒に居たいけど、仕事だから引き止めるわけにはいかない。
い。

僕は止めていた時計を再スタートさせ、また走り出す。

そして走りながらポケットの中の物を取り出す。

それは「キャンディ」だった。どうやら梅味らしい。

確かに飴は栄養補給に向いている。

でもなんでこの時期にもってこいなんだろう？

飴ならシーズンを問わないと思うんだけどなあ。

彼女の考えていることがいまいち理解できなかったが、その梅キャンディを口に含む。

梅の味が口いっぱいに広がる。雨の中彼女が届けてくれた飴はとても美味しい。

市街地に入ると雨がやんだので、ラスト3キロは少しペースを上げて走る。

そして自宅に着き、時計を止めると1時間55分07秒。いい感じだ。

帰宅しシャワーを浴びて部屋に戻ると、携帯が光っている。

光の色が緑ということは彼女からのメールだ。

件名には『回答』と書いてある。

どういうことだろう？

『あのキャンディの意味わかりましたか？』

やっぱり意味があったのか、さっぱりわからなかった。

『あれは梅味のキャンディだったよね？だから梅の飴↓梅の雨↓

梅雨↓6月の雨でした』

なるほどこの時期にもってこいとはこういうことだったのか。

と言うか、これが言いたい為にわざわざ仕事前の雨の中、あそこで待っていたの？

彼女の行動がおちやめすぎて悶絶してしまいそうだ。

第二回：【6月の雨】 お題「キャンディノ飴」（後書き）

7回投稿する企画物だったので連載形式にただけなのですが、せっかく連載形式にしたんだし。と思い直して1話完結ではなく連載することにしました。

連載にするか、全く違う物にするかですいぶん悩みました^^;

第三回：【一時保留】 お題「クッキー」

その瞬間は突如訪れた。

「千春、結婚してください」

まったく予期せぬ告白に目の前が真っ白になり、頭が混乱する。あまりの出来事になんと答えればいいかわからず、思わず口をついて出た言葉が。

「少し考えさせて」

自分の発した言葉に自分で驚く。そして逃げるように走り去ってしまう。

どこをどう逃げてきたのだろう、気付けば家の近くを歩いていた。付き合い始めてもう6年が経つ。もちろん結婚も考えていた。いつかは結婚したいと思っていた。それなのに突然の告白に動揺してしまって、回答を保留してしまった自分が情けない。

しょぼくれた顔のまま家に帰ると、母が夕飯の仕度をしていた。自分の部屋がある二階へ上がるため、リビングを横切って階段へ向かう。

階段を上がりきったところで姉とばったり会う。

「どうしたの？ 冴えない顔してるわね」

「お姉ちゃん……」

「どうしたの千春、何かあったの？」

「プロポーズされた」

そう答えながら、先ほどの自分自身の回答を思い出し、思わず涙ぐんでしまう。

「え？ 千春がプロポーズされたの？ なんで？」

相当驚いている。当然かもしれない。

「お母さん、ちょっと聞いて。大ニュース」

姉は大声で叫びながら階段を駆け下りる。

しばらくして母を伴ってきた姉が部屋のドアをノックするが、返事を待たず入ってくる。

「千春、プロポーズされたって本当？」

その問いにゆっくり頷き応える。

「そう、良かったじゃない。悠ちゃんいい子だし」

お母さんに言われなくてもわかっている。それなのに逃げてきてしまった……

「私もまだなのに、なんで千春が先にプロポーズされるのよ。許せないわ」

「いいじゃない、千春は奥手だからどうなるか心配していたんだから、母さん嬉しいわ。それで式とかどうするかもう決めてるの？」

「それが、気が動転して逃げてきちゃって、まだ返事してないんだ」「は？あんた馬鹿じゃないの？なんですぐに返事しないのよ」

お姉ちゃんの罵声が飛んでくる。

「だって、まさかプロポーズされるなんて思ってたから……」

「そりゃそうでしょうね。普通プロポーズなんて男からするものだからね」

「そうよ千春、あんたがいつまで経ってもはつきりしないから、悠ちゃんから告白してくれたのよ。それなのに返事もせずに逃げ帰ってくるなんて。悠ちゃんがかわいそうよ。きつと今頃家で落ち込んでるわよ」

「ほんと馬鹿なんだから」

「うん」

なんと言われてもいい返す言葉がない。自分の意気地の無さには情けなくて涙が出る。

その時携帯の着信音が鳴る。悠はるかからのメールだ。

僕は恐る恐る携帯を開く。母も姉もじっと見守る。

「悠ちゃんからメール？なんて？」

「明日家に来て欲しいって」

「そう、明日はちゃんと返事するんだよ」
「うん」

悠の部屋にはもう幾度となく招かれている。
しかし今日はいつもと違う。ここまで緊張するのは初めて訪れた
時以来かもしれない。

いつものようにチャイムも鳴らさず玄関を開ける。

「あつ、千春こっち。キッチンへきて手伝って」

ドアを開けたとたんいつもと変わらないトーンの声が玄関まで響く。

僕は激しく緊張しているのだが。

「何してるの？」

「今クッキー作ってるの。ちょっと手伝って」

悠はお菓子作りが得意だ。今もあのアイスクリーム屋で働いているが、将来は自分のお店を持ちたいといつも話してる。

「もうほぼ出来てるね」

「うん、型抜きをするんだけど千春の好きな型で抜き取って」

僕はその場にあるいくつかの型抜きを使って適当に型を取っていく

「ありがとう、じゃ焼くね。焼きあがるまで少し時間があるから、
部屋で待つて。私はここを片付けてから行くから」

そう言われて僕は悠の部屋で待つことにした。

昨日は不意を突かれて気が動転してしまったけど、本来なら僕が
告白するべきことだったんだ。

なかなか言い出せなかったけど、僕だって悠と結婚したいとずっと
思っていた。だからもちろんプロポーズは受けるつもりだ。

携帯の時計を確認するともう30分以上経っている。

遅い。クッキーって焼くのにそんなに時間がかかったわけ？確か
前に15分くらいで焼けると言ってたような気がするけど。

「お待たせ」

クッキーをいっぱい乗せた皿を持って、悠が部屋に入ってきた。

「悠、僕……」

「話はいいからクッキー食べてみて。まだ完全には冷めてないけどね」

僕は話をしたかったのだけど、クッキーを目の前に差し出されたのでとりあえず食べることにした。

大きめの円盤型のクッキーを手に取り、一口かじる。

か、硬い。噛み砕けない。

「硬いね。失敗？」

「ううん。そのクッキーって何で硬いかわかる？」

お菓子なんて作ったことのない僕にわかるはずもない。

僕が首を横に振ると悠が答えてくれる。

「クッキーの硬さって焼き時間で変わるんだよ。サクサクしたやわらかい食感にするならもっと焼く時間を短くすればいいの、逆に硬くしたい時は長くするの」

「それで？今日は硬いクッキーを作る為に焼く時間を長くしたの？」

悠が俯き加減で寂しそうな目をクッキーに向ける。

「どうしたの？」

「クッキー割れない？」

僕の問いかけには答えず、クッキーが割れないか聞いてくる。

何か意味があるのかと、僕は奥歯でしっかりクッキーを噛み合わせ手に持ったクッキーを折る。

少し勢いよく折り曲げすぎたのか、クッキーが割れたのはいいが、破片が飛び散ってしまった。

「ごめん。屑がとんでしまった」

「いいよ、後で掃除するから」

悠がまた俯いたままだ。

「ねえ悠、昨日の話だけど」

「千春！」

僕の言葉をかき消すように悠が僕の名前を叫ぶ。

びっくりして悠の顔を凝視する。

「私達付き合い始めて六年経つよね」

僕は頷く。

「このクッキーの焼き時間と同じ、長いよね」

何が言いたいんだろう？悠の真意が見えないので慎重に頷く。これ以上悠を傷つけないから。

「付き合っても長くなるとクッキーと同じ、結び付きが固くなるよね」

「うん。僕達の結び付きは簡単に割れたりしないよ」

「でもね、今さっきのクッキーと同じ、硬いぶん割れる時は一気に割れて飛び散るのよ」

何が言いたいんだろう？昨日返事せずに逃げてしまったことで、僕達の結び付きは粉々に割れてしまったということなのか？

「硬いと柔軟性に欠けてしまって、変に力を加えると、逆に割れやすくなるもののなのよ」

どういうことだ。僕は最悪の事態を予期して鼓動が早くなる。

嫌な汗が噴き出し、背筋が寒くなるような感覚にとらわれる。

何か言わなければ。本当にこのまま割れてしまうかもしれない。

「ぼ、僕達の結び付きは固いけど、割れたりなんかしていない」

悠は俯いたままポツリとつぶやく「本当？」

「ああ、本当だよ、これか先もずっと割れることなんてない」

「だけど……私の心は割れちゃいそうだよ」

そう言っただけで目の奥に涙の涙を浮かべる。

僕は慌てて悠の隣に移動して肩を抱き寄せる。

「千春のことは大好きだよ。千春が優柔不断で意気地なしなのもわかってる。そんなところも好きだけど、けどいつも私ばかり」

俯いているので顔は髪で隠れている。けど悠の頬に涙の雫が流れているのはわかる。

そして何を言いたいのかもよくわかる。

僕達が付き合い始めるきっかけになったメモも悠からもらった物

で、告白も悠からだった。

悠は優柔不断な僕を受け入れてくれていた。だから僕はいつしかなんでも悠任せだった。

今回のプロポーズも本来なら男である僕がするべきだった。でもなかなか言いだす勇気のない僕は、心のどこかで悠から言ってくれるんじゃないかと、期待していたのかもしれない。

それなのに昨日のあの態度。悠が不安になるのも当然だ。

「悠、ごめん。昨日は情けない話だけど、いきなりのプロポーズで気が動転してしまつて逃げ出してしまった。」

悠は俯いたまま頷く。

「じゃ昨日の返事してくれる？」

「昨日の返事よりも、僕から言わせて欲しい」

「いいよ。じゃ千春から言つて」

僕は悠を正面から強く抱き締める。

「辛い思いをさせてごめん。これからはもう少し男らしくして、必ず悠を幸せでいっぱいの毎日が送れるように頑張る。だから僕と結婚してください」

「はい。こんな私でよければもらってください。でも優柔不断で頼りない千春も好きだから、無理して男らしくなりすぎないでね」
首に回していた腕をほどいて肩を持ち悠の顔を見つめる。

「うん。程ほどに男らしくするようにするよ」

そう言つて涙に濡れた悠の唇に僕の唇を近づける。

数センチに詰まつた距離に悠は目をつぶり次の瞬間を待っている。お互いの唇が触れると悠が僕の頭の後ろで腕を絡ませ強く引き寄せる。

僕も悠を思いっきり抱き締める。

プロポーズと共にした口づけは、今までで一番熱いキスだった。

「ねえ、今日は何でクッキーを焼いたかわかる？」

「え？固いクッキーを二人の結び付きとかけていたんじゃないの？」

「それはそうだけでもう一つ意味があるんだよ」

なんだろう？悠はこの手のなぞかけが好きだなあ。

「なに？」

「昨日千春が私のプロポーズを一時保留したでしょ？」

「うん。だから？」

「クッキーってパソコン用語で一時保留って意味もあるでしょ？」

「それを言うなら一時保存じゃない？」

「千春、男のくせに細かい！どっちでも一緒でしょ」

「保存と保留はよく似てるけど微妙に意味が違うような」

「うるさい」

「あつ、顔が赤くなってる」

「うるさい、うるさい、うるさい」！

そう言っただけで僕の胸に飛び込んできて、ぽかぽか叩いてくる。もういつも悠に戻ってる。

でもそんな悠を見ながら一つの疑問が……

勝気な悠が泣くほど不安だったにも関わらず、あの状況でお菓子のクッキーとパソコン用語のクッキーを掛けるということを考えてたんだろうか？

第四回：【いつでも一緒】 お題「プリン」

「ねえあなた」

7歳になる娘を寝かしつけ、リビングに戻ってきた妻が静かに私に話しかける。

「なんだい？」

「お店の目玉商品として、オリジナルプリンを出したいと思っているのだけど、何か良い案はないかしら。一緒に考えて欲しいの」

悠と結婚して9年目、一人娘の夏海なつみは元気に育ち小学2年生になった。私の勤める会社は小さいながらも業績が良く、給料も人並み以上に貰っている。

そして悠の昔からの夢だった洋菓子店『ル・レーヴ・デ・ザンジュ』（フランス語で“天使の夢”の意味）も2年前にオープンして軌道にのっている。

三人の生活は何もかもが順風満帆だ。

「プリン限定なの？オリジナルアイスとかじゃダメなの？」

「アイスは二人の大切な思い出でしょ。うちの店の一押しはあの時のアイスだからあれは変えない」

「あの時のアイスって？」

「あの時は、あの時よ。もしかして忘れちゃったの？」

「ああ、あの時か…… えーっと…… なんだったかなあ？」

そこまで言って悠の顔を見る。

睨みつけるような目つきをしながらも、少し寂しそうに唇を尖らせ頬をふくらませている。

「本当に忘れちゃったの？大切な思い出のアイスなのに」

これ以上意地悪をすると本当に怒り出しかねない。

「嘘だよ。ちゃんと覚えてるよ、『ナッツ&メープル』だろ。忘れるはずがないじゃないか」

「ちゃんと覚えててくれたんだ」

僕は『当然』と言わんばかりに、得意げに頷く。

悠はホッとした表情を浮かべ話を戻す。

「アイス以外にもいろいろな商品を考えてるんだけど、プリンだけいまいち良い案が浮かばないの。そこであなたにも何か考えて貰おうと思って」

「なるほど、そういうことか。作るのは素人だけど、食べるのは専門だからね」

「そうでしょ、消費者としての意見を聞かせて欲しいの」
「任せてくれ」

とは言ってみたものの、いざ考えるととなかなか思い浮かばない。

しばらく考えてなんとかひねり出す。

「なめらかプリンとか」

「ありきたりねえ」

「北海道牛乳100%濃厚プリンとかは？」

「うーん。なんかピンとこないわね」

今までいろんな人達が試行錯誤して作り出してきたんだ、僕なんかが簡単に新しいプリンを考えられるはずなかった。

任せると偉そうに言ったからには何か案を出さないと格好がつかない。うなり声をあげながら考え込んでいると「おしっこ」と、僕の後ろから声が聞こえた。

振り向くと夏海がダッフィーのぬいぐるみを抱いて、リビングの扉の所に立っている。

悠が席を立とうとしたのを制止して、僕が夏海をトイレに連れて行く。

夏海の手を引きながらトイレに向かう。

目を擦り眠そうにしている夏海に話しかける。

「夏海はプリン好きか？」

「うん、大好き」

つい今しがたまで眠そうにしていたのに、プリンと聞いて目を輝かせる。

「どんなプリンがいい？」

「ママのプリンが一番好き」

そういうことを聞いてるんじゃないんだけどな。

トイレに着いた。

「一人ではいれるよね？」

「うん」

そう言っただけで中に入るが、ドアは隙間を空けたままだ。

僕は中にいる夏海に話の続きをする。

「ママのプリンが一番美味しいのはわかってるけど、夏海はママにどんなプリンを作ってほしい？」

「いちごが乗ってるやつがいい」

「いちごか」

「あとクリームも」

あっさりと次々でてくるのでびっくりしてしまふ。

「今度ママに作ってもらおうか」

それを聞いてうれしくなったのか勢いよくドアを開けて、『はい』と大きな返事をする。

今度は僕が夏海を寝かしつけてリビングに戻る。

「トイレに行くときに夏海と話してたんだけど、いちごとかフルーツの乗ったプリンはどう？」

「フルーツか、なるほどね」

「あと、生クリームとか」

「それって夏海の家？」

「そうだよ、夏海が食べたいプリンだって」

「いちごと生クリームの組み合わせはいいかもね」

「そうか、それはよかった」

「で？あなたの家は？」

「え？僕の？夏海が良い案を出してくれたから、それでいいんじゃないの？」

「うん。それもいいんだけど、今回のオリジナル商品は三人で案を出し合って作りたいの」

「どういうことだろう？別に三人全員で案を出さなくても売れる商品を作ればいいんじゃないんだろうか？」

不思議そうな顔をしている僕に悠が説明をしてくれる。

「今、私達とても幸せじゃない？」

僕は頷く。

「あなたの仕事も、私の仕事もうまくいって、夏海も何事もなく健康にすくすく育ってくれている。この幸せがいつまでも続きますように。と願いを込めて三人で一つの商品を開発して、それを今後ずっと私達がおばあちゃん、おじいちゃんになってもお店のオリジナル商品として守っていききたいの」

「なんだか話が大きいね」

「今の幸せがいつまで続くかなんて誰にもわからない。でもどんな辛いことがあっても三人で考えたオリジナルプリンを食べて乗り越えていきたいの」

「そんな言い方するなよ。なんか今の幸せがもうすぐ終わってしまいそうじゃないか」

「そうじゃないわ、いつまでも今の気持ちを忘れないようにしましよ。ってことよ」

「わかった」

「ありがとう。じゃ夏海の意見を取り入れて、イチゴと生クリームを使いましょう」

「うん。それで悠の案はなんだい？僕は悠の案を聞いてから考えるよ」

「なんだかすごいプレッシャーだ。オリジナル商品がこけたら幸せも何もあつたもんじゃない。」

「私は入れ物にこだわろうと思ってるの」

「入れ物？」

「うん、陶器の壺を作って、それにお店のロゴを入れたいと思ってるの」

「なるほど」

「壺型だから、スプーンですくって食べてもらう感じにするの。そうすれば夏海のイチゴと生クリームを上部にトッピングできるしね」

「なるほど」

「あなた、さつきから『なるほど』ばかりじゃない」

「そうだったけ？」

「そうよ。壺の一番下にはカラメルソースを敷いて、その上に濃厚でなめらかなカスタードプリン、そして上部にカットしたイチゴを乗せて生クリームで蓋をする感じにするわ」

「おい、それで完成してしまってるじゃないか。僕の案の入り込む余地がない」

「このプリンになにか加えて」

無茶だ。聞いているだけで十分美味しそうなプリンが完成してるのに、これ以上何を足せばいいんだ？変に付け加えると逆にまずくなってしまう可能性が大だ。

「難しいな」

「そんなに難しく考えなくていいわよ。何か適当に言ってみて。良さそうなら試作品作ってみるから」

その適當つてのが出てこないんじゃないか。

「何か好きなものをトッピングするイメージでもいいし、何か言ってみて」

「そうだなあ。チョコレートとかはどうかかな？」

「チョコ？カスタードプリンじゃなくて、チョコプリンにするの？」

「違う違う、チョコをトッピングというか上からかけるとか」

「生クリームの上にチョコをかけるのね。悪くないかも」

いきなり頭の中で閃光が煌めいた。

「そうだ！いいこと思いついた！」

「しー、静かにして。夏海が起きちゃうわよ」

自分の素晴らしい思いつきに、僕は思わず手を叩いて叫んでしまっていた。

「ごめん、ちよつと良い案が思い浮かんだんで興奮してしまった」

「なんなの？あなたの思いついた案って」

「イチゴだよ。イチゴにチョコレートをコーティングするんだよ。」

そしてそのイチゴの上から生クリームを乗せるんだよ。そうすると生クリームもチョコ生クリームとして味わえるし、チョコイチゴもカスタードと絡めてチョコ味カスタードも楽しめるんじゃないかな？」

「あなた、それいいわ。イチゴとチョコは相性バツチりだし、カスタードとの相性もいい。きっと美味しいわ」

「そうか、それはよかった。じゃ明日にでも作ってみてよ」

「今から作るわ」

「え？今から？もう12時になるし寝たいんだけど……」

「善は急げって言うでしょ。ちよつと待ってて試作品だからすぐにできるわ」

その夜は結局2時過ぎまで付き合わされた。

その後少し調整をし一カ月後、専門の業者に頼んでいた壺が完成したので、商品になる形そのままに、三人で意見を出し合ったプリンを試食する日が来た。

「夏海が食べたいって言ってたイチゴと生クリームの乗ったプリンよ」

「うん」

「よかったな、ママが夏海のために作ってくれたんだよ。一緒に食べようか」

「うん」

蓋を開けると夏海が目が輝く。そしてうわーと歓声を上げる。どうやらそうとう興奮してるようだ。

「いただきます」

そう言って一気に食べ始める。途中何度も美味しいと連呼しながらあつという間に食べ終わった。

「もつと食べたい」

僕は自分の食べかけのプリンを夏海に渡す。

ありがとうと言うのと同時にもう食べ始めている。

僕は悠に話しかける。

「壺もいい感じで味が出てるし、プリンも美味しい。イチゴとチョコレート、生クリームも良いバランスだよな」

「そうね、美味しいわ。あなたの言ったとおりイチゴを賽の目にカットしたのも正解ね。イチゴのサイズがカスタードとの一体感を生み出してるわ」

「そんなに褒められると照れるな」

「イチゴは夏海が考えたんだよ」

夏海が話に割ってはいる。

「そうだね、夏海が考えてくれたんだよね」

そう言う満足げに頷く。

「これからはこのオリジナルプリンが私達の幸せの象徴よ」

また変な言い方をする。

「幸せの象徴ってなんだよ。普通に僕達が考えたオリジナルプリンでいいじゃないか」

「そうね。ちょっと言い方が大袈裟だったわね」

「それはそうと、オリジナルプリンってのもなんだし何か名前をつけてみてはどうだろ？」

「トウジュール・アンサンプル・プリン」

「え？なに？」

「『トウジュール・アンサンプル・プリン』もう考えてあるわよ」

「そうなんだ、カッコいい名前だけど、ちょっと長くない？」

「いいの。これは譲れないんだから」

「なんか意味があるの？」

「特にないわ！語呂がいいから使わせてもらったの」
僕はがつくりうなだれる。

それを見て夏海が大笑いする。

それにつられて悠は涙を流して大笑いしている。

僕もとっても楽しい気分だった。

でもその悠の涙の本当の意味を、この時はまだ知るよしもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1728s/>

企画【candy store】

2011年6月5日18時10分発行